

平成26年度
考古学が語る古代オリエント
Ancient Orient Revealed through Excavations in 2014

第22回西アジア発掘調査報告会報告集
Proceedings of the 22nd Annual Meeting of Excavations in West Asia



日本西アジア考古学会
Japanese Society for West Asian Archaeology

平成26年度 考古学が語る古代オリエント

Ancient Orient Revealed through Excavations in 2014

第22回 西アジア発掘調査報告会報告集 目次

第22回西アジア発掘調査報告会の開催にあたって 2
西藤 清秀

<先史時代の調査>

南アジア人類史の解明を目指して—パキスタン・ソアン川流域旧石器時代遺跡群調査(2014年)— 8
野口 淳、下岡 順直、ムハンマド・ザヒル、ムハンマド・サリーム
In search of human evolutionary history in South Asia 2014 survey of the Soan Valley area, Islamabad Capital Territory, Pakistan
NOGUCHI, Atsushi / SHITAOKA, Yorinao / ZAHIR, Muhammad / SALIM, Muhammad

北ユーラシアの旧人・新人交替劇—第2次ウズベキスタン旧石器遺跡調査(2014年)— 14
西秋 良宏、オタベク・アリブジャノフ、ルスラム・スレイマノフ、アリシャル・ラジャボフ、仲田 大人、新井 才二、三木 健裕
Replacement of Neanderthals by Modern Humans in North Eurasia: The Uzbekistan-Japan Joint Palaeolithic Research in 2014
NISHIAKI, Yoshihiro / ARIPDJANOV, Otabek / SULEYMANOV, Rustam / RAJABOV, Alisher / NAKATA, Hiroto / ARAI, Saiji / MIKI, Takehiro

初期定住集落の姿を探る—トルコ、ハッサンケイフ・ホユック2014年度の調査— 20
三宅 裕、前田 修、アブドゥセラム・ウルチャム
Excavations at Hasankeyf Höyük in Southeast Anatolia: the 2014 Season
MIYAKE, Yutaka / MAEDA, Osamu / ULUÇAM, Abdüsselam

肥沃な三日月地帯東部の新石器化・都市化—イラク・クルディスタン、カラート・サイド・アハマダン遺跡調査(2014年)— 26
常木 晃、西山 伸一、アハマッド・サーベル、長谷川敦章、辰巳 祐樹、宮内 優子
Neolithization and Urbanization in the Eastern Part of the Fertile Crescent: The 2014 Excavations at Qalat Said Ahmadan, Iraq Kurdistan
TSUNEKI, Akira / NISHIYAMA, Shin'ichi / SABER, Ahmad / HASEGAWA, Atsunori / TATSUMI, Yuki / MIYAUCHI, Yuku

コーカサスの新石器時代前夜を探る—アルメニア、グルジアにおける考古学調査(2014年)— 34
有村 誠、藤井 純夫
Research on the transition to the Neolithic in the Caucasus: Archaeological works in Armenia and Georgia in 2014
ARIMURA, Makoto / FUJII, Sumio

南コーカサス地方の新石器時代—第7次発掘調査(2014年)— 40
門脇 誠二、ファルハド・キリエフ、下釜 和也、仲田 大人、赤司 千恵、新井 才二、三木 健裕、西秋 良宏
The Neolithisation of the Southern Caucasus: The 2014 Excavation at Haji Elamxanlı Tepe, the Republic of Azerbaijan
KADOWAKI, Seiji / GULIEV, Farhad / SHIMOGAMA, Kazuya / NAKATA, Hiroto / AKASHI, Chie / ARAI, Saiji / MIKI, Takehiro / NISHIAKI, Yoshihiro

<古代遊牧社会の調査>

ヨルダン南部ジャフル盆地の遊牧化—トール・グワイール1号遺跡、ジャバル・ジュハイラ遺跡の発掘調査(2014年)— 48
藤井 純夫、足立 拓朗、山藤 正敏、長屋 憲慶
Pastoral Nomadization in the Jafr Basin, Southern Jordan: Excavations at Tor Ghuwayr 1 and Jabal Juhayra, 2014
FUJII, Sumio / ADACHI, Takuro / YAMAFUJI, Masatoshi / NAGAYA, Kazuyoshi

アラビア半島の遊牧化—ワディ・シャルマ1号遺跡の第2次・第3次発掘調査(2014年)— 54
藤井 純夫、足立 拓朗
Pastoral Nomadization in the Arabian Peninsula: Excavations at Wadi Sharma 1, 2014
FUJII, Sumio / ADACHI, Takuro

ユーラシア古代遊牧社会形成の比較考古学—キルギス、ナリン川流域での日本—キルギス合同考古学調査(2014年)— 60
久米 正吾、アイダ・アブディカノフ、オロズベク・ソルトバエフ、エミル・スルタノフ、早川 裕次、宮田 佳樹、荒 友里子
Formation of Nomadic Societies in Ancient Eurasia: The Joint Kyrgyz-Japan Archaeological Project in the Naryn Valley, Kyrgyzstan, 2014
KUME, Shogo / ABDYKANOVA, Aida / SOLTOVAEV, Orozbek / SULTANOV, Emil / HAYAKAWA, Yuichi / MIYATA, Yoshiki / ARA, Yuriko

ユーラシア古代遊牧社会形成の比較考古学—キルギス、クラマ遺跡の発掘調査(2014年)— 66
テミルラン・シャルギノフ、大沼 克彦
Formation of Nomadic Societies in Ancient Eurasia: Excavations at Kurama, Kyrgyzstan, 2014
CHARGYNOV, Temirlan / OHNUMA, Katsuhiko

第22回西アジア発掘調査報告会報告集
Proceedings of the 22nd Annual Meeting of Excavations in West Asia

<エジプトの調査>

クフ王第2の船発掘・保存・復原プロジェクト—エジプト、クフ王第2の船、2014年— ……74

高橋 寿光、吉村 作治、黒河内宏昌

Khufu's Second Boat Project: Egypt, Khufu's Second Boat, 2014
TAKAHASHI, Kazumitsu / YOSHIMURA, Sakuji / KUROKOCHI, Hiromasa

古代エジプト聖なる丘の発掘調査—エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡第23次調査(2014年)— ……79

河合 望、高橋 寿光、吉村 作治

Excavation at a Sacred Outcrop in Ancient Egypt: The 2014 Season of Abusir-Saqqara Project
KAWAI, Nozomu / TAKAHASHI, azumitsu / YOSHIMURA, Sakuji

コンスウエムヘブ墓の発見—エジプト、アル=コーカ遺跡第7・8次調査(2013-15年)— ……83

近藤 二郎、河合 望

The New Discovery of the Tomb of Khonsuemheb, The 7th and 8th Season of the Work at al-Khokha in the Theban Necropolis (2013-15)
KONDO, Jiro / KAWAI, Nozomu

王朝衰退期の都市—エジプト・アコリス遺跡の調査2014— ……88

花坂 哲、川西 宏幸、辻村 純代

AKORIS Archaeological Project 2014
HANASAKA, Tetsu / KAWANISHI, Hiroyuki / TSUJIMURA, Sumiyo

<歴史時代の調査>

先端技術で世界遺産を記録する オマーン、バート遺跡群のデジタル文化遺産目録構築プロジェクト ……96

近藤 康久、三木 健裕、野口 淳、早川 裕弐、小口 高

Documenting a World Heritage Site with the Latest Technologies Bat Digital Heritage Inventory Project (Oman)
KONDO, Yasuhisa / MIKI, Takehiro / NOGUCHI, Atsushi / HAYAKAWA, Yuichi S. / OGUCHI, Takashi

新バビロニアの拠点遺跡を探る—イスラエル、テル・レヘシュ第8次調査(2014年)— ……101

小野塚拓造、橋本 英将、桑原 久男

Investigating a Neo-Babylonian outpost: Excavations at Tel Rekhesh 2014, Israel
ONOZUKA, Takuzo / HASHIMOTO, Hidemasa / KUWABARA, Hisao

パレスチナにおけるビザンツ時代の終わり始まり—パレスチナ自治区ベイティン遺跡発掘調査報告(2014年度)— ……106

杉本 智俊

The Beginning and End of Byzantine Period in Palestine: The Third Archaeological Expedition to Beitin, Palestine, in 2014
SUGIMOTO, David, T.

オマーン湾港町ディバの住居跡発掘—アラブ首長国連邦ディバ遺跡第10次調査(2014年)— ……111

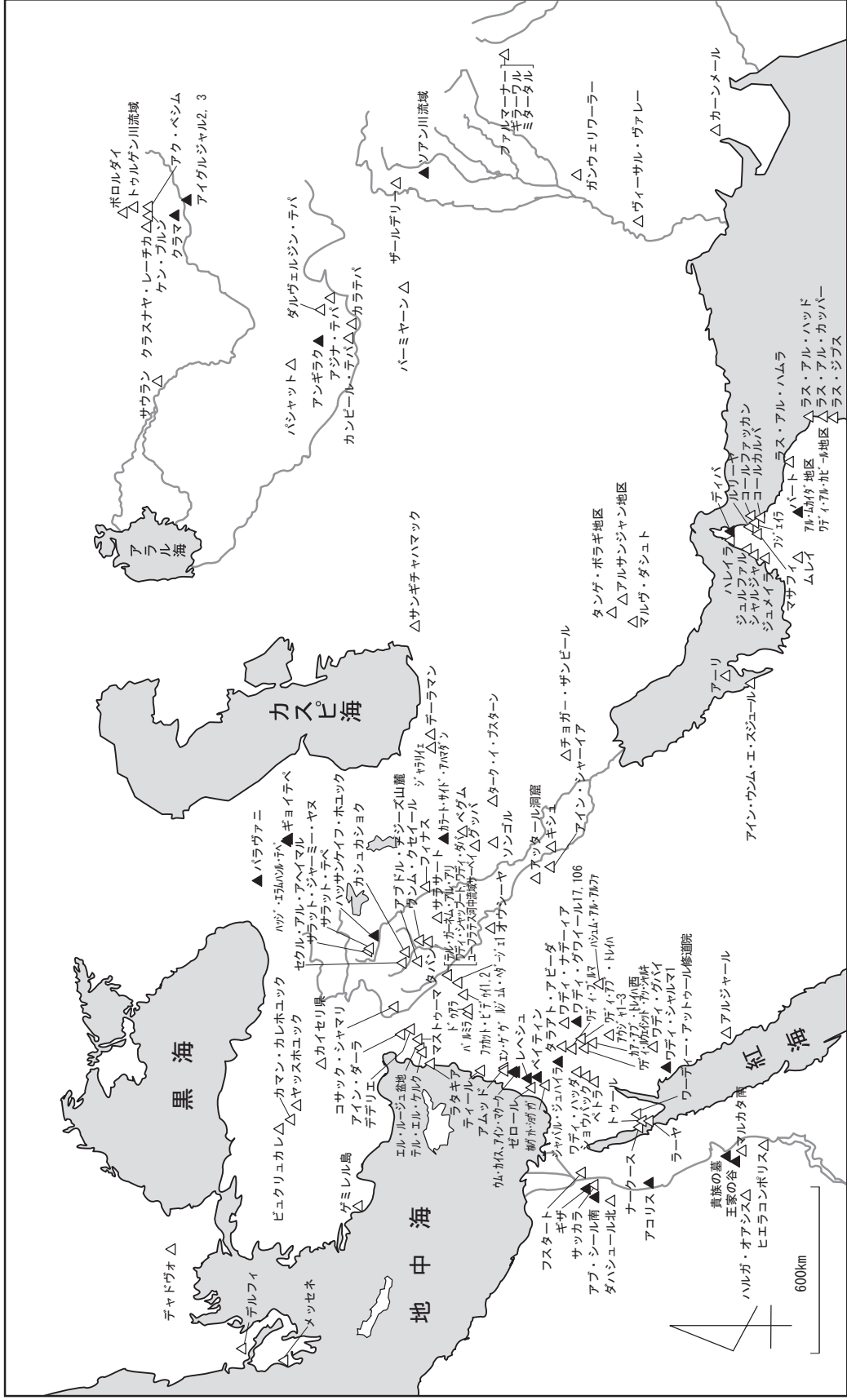
佐々木達夫、佐々木花江

Excavations of the Port Town Dibba in the UAE, 2013-2014
SASAKI, Tatsuo / SASAKI, Hanae

グレコ・ローマン都市ガダラの考古学—ヨルダン、ウム・カイス／ガダラの第10次発掘調査(2014)— ……117

松本 健

Archaeological study of Greco-Roman City, Gadara: 10th Season of Excavation at Umm Qais/ Gadara, Jordan, 2014
MATSUMOTO, Ken



古代オリエントにおいて日本隊が調査した主要遺跡（▲2014年の調査地、△2013年以前の調査地）

南コーカサス地方の新石器時代 —第7次発掘調査（2014年）—

The Neolithisation of the Southern Caucasus:
The 2014 Excavation at Haji Elamxanlı Tepe, the Republic of Azerbaijan

門脇 誠二
KADOWAKI, Seiji

名古屋大学博物館助教
Assistant Professor, Nagoya University

ファルハド・キリエフ
GULIEV, Farhad

国立科学アカデミー考古民族学研究所考古民族学博物館館長
Director, Museum of Archaeology and Ethnology, The Institute of Archaeology and Ethnography of National Academy of Sciences

下釜 和也
SHIMOGAMA, Kazuya

古代オリエント博物館共同研究員
Co-operative Research Fellow, Ancient Orient Museum

仲田 大人
NAKATA, Hiroto

青山学院大学文学部講師
Lecturer, Aoyama Gakuin University

赤司 千恵
AKASHI, Chie

東京大学・日本学術振興会特別研究員PD
JSPS Postdoctoral Research Fellow, The University of Tokyo

新井 才二
ARAI, Saiji

東京大学大学院人文社会研究科博士課程
Ph.D Student, The University of Tokyo

三木 健裕
MIKI, Takehiro

東京大学大学院人文社会研究科博士課程
Ph.D Student, The University of Tokyo

西秋 良宏
NISHIAKI, Yoshihiro

東京大学総合研究博物館教授
Professor, The University of Tokyo

1.はじめに

西アジアの北部に位置する大コーカサス山脈の南麓から小コーカサス山脈におよぶ一帯（カスピ海と黒海のあいだ）が、南コーカサス地方と呼ばれている（図1）。この地域に位置する現在の国家は、アゼルバイジャン、アルメニア、グルジアであり、その南はトルコとイラン、北はロシアに接する。ロシア側（北コーカサス）に位置するソチは、2014年のオリンピック冬季競技大

会が開催された都市である。

南コーカサス地域における考古学調査の多くは現地の研究者によって行われているが、外国の研究者との共同調査が近年増加しており、日本以外にはイスラエルやフランス、ドイツ、アメリカなどが含まれる。私たちの調査はアゼルバイジャン共和国において2008年から始まり、東京大学総合研究博物館が主となる研究チーム（代表：西秋良宏）とアゼルバイジャン国立科学アカデミー考古民族学研究所（代表：ファルハ

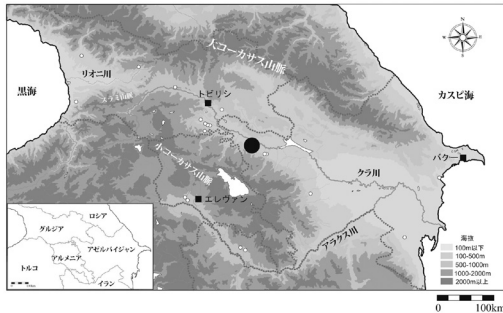


図1 南コーカサス地方の地図。中央の●が調査地

ド・キリエフ)が協同する形をとっている。私たちの調査は新石器時代を対象にし、南コーカサスにおける農耕牧畜経済やそれを支えた物質文化が、いつ、どのように発生したのかを明らかにすることを目的としている。その研究対象として最初選ばれたのが、アゼルバイジャン西部に位置するギョイテペ遺跡である。2008年から2013年までの発掘調査の結果、ギョイテペにかつて存在した初期農村の年代や物質文化、栽培・飼育された動植物の内容について詳細な記録を得ることができた。その内容は、南コーカサス地方における農耕牧畜の開始を示す新石器文化(シヨムテペ・シュラヴェリ文化)に属し、この文化の年代や物質文化の内容、居住形態、社会構造などの解明に資することが期待される。例えば、シヨムテペ・シュラヴェリ文化の初期農村址では、一般に「貯蔵庫」といわれる小型円形遺構が数多くみつかるが、ギョイテペの調査を通して、その遺構に実際にムギ藁が貯蔵されていた希少な証拠を得ることに成功した(Kadowaki et al. 2015)。しかしながら、こうした成果の一方で、ギョイテペの古代農村においてすでに花開いていた初期農耕の技術と文化、そして社会がいつ、どのように発生したのかという問題が残さ

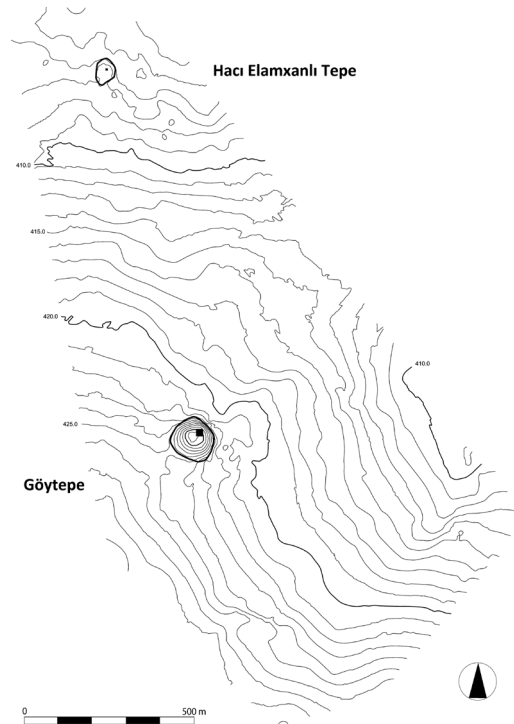


図2 ハッジ・エラムハンル・テペ遺跡とギョイテペ遺跡

れていた。

この問題に重要な知見を与えてくれると期待される遺跡が、本稿で報告されるハッジ・エラムハンル・テペである。この遺跡は2011年に発見された後、2012年から発掘調査が行われており、以前の西アジア発掘調査報告会でも紹介されてきた(西秋他2014)。これまでの結果、ハッジ・エラムハンル遺跡にも初期農村址が残されていることが分かったのであるが、重要な点は、その年代がギョイテペ遺跡よりも古く、かつ物質文化や栽培・家畜種の内容にも違いがあることである。つまり、ギョイテペ遺跡が示す初期農耕文化(シヨムテペ・シュラヴェリ文化)が、いつ、どのように発生したかという問題に対する答えがハッジ・エラムハンル遺跡から得られる見込みが大

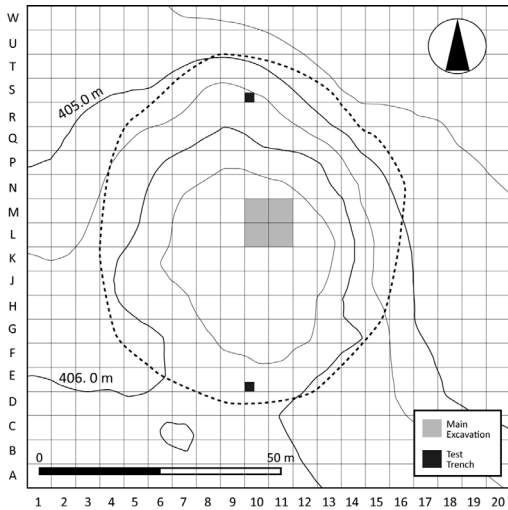


図3 ハッジ・エラムハンル・テペの地形図と発掘区(灰色)・試掘区(黒色)。点線はマウンドの範囲を示す。

きい。この遺跡において行われた2014年の調査(8月21日～9月18日)について以下に報告する。

2. ハッジ・エラムハンル・テペ遺跡の発掘

ハッジ・エラムハンル・テペ遺跡はギョイトペから北北西へ約1.5kmの近さに位置する(図2)。周囲の畑から1.5mほど高いマウンドが60m x 80mほどの範囲にひろがるハッジ・エラムハンル遺跡は、ギョイトペ(径145m、周囲との比高8m)に比べてかなり小さい。このテペの頂部付近に10m x 10mの発掘区が設けられた(図3)。昨年までの発掘調査の結果、ギョイトペと同様に泥レンガで構築された円形家屋やそれに伴う貯蔵施設を発見し、その層序に基づいて新石器時代の堆積を4つの建物レベルに区分した(上からレベル1～4)。2013年の調査終了時点では、下2つの建物レベル(レベル3と4)の堆積がまだ一部残っており、地山にも到達していなかったため、2014年



図4 ハッジ・エラムハンルにおける2014年の発掘風景(北東から)

に発掘を継続した(図4)。以下、2014年の調査成果として、建物レベル3と4について報告する。

(1) レベル3の調査

このレベルで昨年発見された「雪だるま式建築」の調査を継続した(図5)。私たちの命名による「雪だるま式」とは、サイズの異なる2つの円形壁が付随し、雪だるまのように見える建築プランのことを指す(西秋他 2014)。この建築プランは、上層のレベル1と2でも確認されていた。それがレベル3でも繰り返り現れたため、この建築プランは偶然の結果ではなく、意図的に計画された建築様式を示す可能性があると考え、「雪だるま式」という名を提案した。ただし、このプランが本当にハッジ・エラムハンルの初期農耕民による建築伝統だったかどうかを明らかにするためには建築物の精査が必要であった。この目的にとって、雪だるま式建築のプラン全体が現れたレベル3の遺構は絶好の調査対象であった。

調査の結果、雪だるま式建築の特徴は、単に2つの付随する円形壁のプランだけではなく、他の建築構造も含まれることが分かった。例えば、2つの円形部屋は通路に



図5 レベル3の雪だるま式建築物(北から)

よってつながれている。また、その通路の脇には直線状の壁が付随しており、大きい方の円形部屋の内部空間を仕切っている。こうした特徴が、レベル1/2とレベル3の雪だるま式建築の両方に共通して認められた。さらにレベル3では、雪だるま式建築を構成する2つの円形壁の小さい方（雪だるまの「頭」に相当する部分）の壁が建てかえられた跡が確認されたが、新しい円形壁はほぼ同じサイズと位置で構築されていた。家屋が改修された際にも、同じ建築プランが踏襲されていたことを示す証拠といえる。

このように同様な建築プランが繰り返された現象は、集落内における場の利用が一定であったことを示す。例えば、雪だるま式家屋の東側に広がる屋外空間には、円形の土製貯蔵施設が繰り返し設けられていた跡が見つかった(図6)。また、その周辺には多数の炉跡や灰の堆積が広がり、大量の石器や動物骨、炭化植物が分布しており、屋外の活動スペースとして利用されていたことが明らかである。大量の遺物がこの空間に見つかるという事実は、この場所が廃棄場でもあったことを示すが、散らかし放題だったわけではないだろう。鋭利な刃を



図6 レベル3の土製貯蔵施設。同じ場所に作り直された貯蔵施設の断面が上部に見える。

もつ打製石器の石屑が小さい範囲に集中して廃棄された跡が幾つも見つかっている。危険な廃棄物は散らばらないように捨てていたのだと思われる。

発掘区中央に位置する雪だるま式家屋の東隣にもう1つ、円形建築物の一部が昨年発見されており、その調査も継続した。昨年調査した床面には土製の貯蔵庫の他に楕円形の灰だまり遺構が検出されていたが、その面よりも下に住居の壁が続くため、より古い床面が期待された。調査の結果、崩落レンガの厚い堆積の下に床面が検出されたが、その居住期はレベル4に相当すると考えている。

(2) レベル4の調査

レベル3において発掘区中央で検出されていた大型円形家屋(雪だるま式建築の「胴体」に相当する部分)は、壁がレベル3の床面よりも下に続き、さらに古い時期の床面が存在することが分かった。つまり、この円形家屋はレベル4から3にかけて利用されていた。この異なる2つの居住期のあいだでは、床面が新たに残されただけでなく、付随する小型円形部屋の位置が異なっていた。レベル3では南方に小型円形部屋が付



図7 レベル4の雪だるま式建築物(西から)。写真左下の小型円形壁(雪だるまの「頭」部分)の一部がピットで壊されている。



図9 レベル4の雪だるま式家屋(北から)。中央の囲炉裏の周辺で4つの柱穴が検出された。



図8 雪だるま式家屋内の囲炉裏状遺構(レベル4)



図10 雪だるま式家屋(レベル4)の床面で発見された石刃石核(黒曜石)

随して、それに通じる入口が設けられていたのに対し、レベル4では北側に入口があり、付随する小型円形部屋に通じていた(図7)。また、これらの入り口の脇に直線状の仕切り壁が存在するパターンが、両レベルに共通して認められた。このように、レベル4から3にかけて行われた改築の際に小型円形部屋の位置が変わったとしても、雪だるま式建築の構造が維持されていたことが分かった。

レベル4では、発掘区中央に位置する雪だるま式建築物の最初期の床面が検出された。特に、大型円形部屋(雪だるま式建築の「胴部」)の床面は極めて良好に保存されており、様々な遺構や遺物が検出され

た。まず、この円形部屋は、入口脇から中央付近に延びる直線壁によって仕切られていた。そして、この仕切り壁の末端近く(部屋の中央付近)には、土製の袖壁で囲まれた囲炉裏状の遺構が検出された(図8)。また、この囲炉裏を囲むように4つの小さな柱穴が検出された(図9)。この柱は住居の屋根を支えたかもしれないし、囲炉裏の上部に掲げられた棚を支えたのかもしれない。

また、囲炉裏の西側の壁沿いには土製貯蔵庫1つとピット2つが並んで発見された(図9)。囲炉裏の東側にも小型の炉跡が幾つか分布し、その周辺から壁際にかけて密度が高くなるように石器や骨角器、動物骨、

自然礫が大量に分布していた。これらの遺物には、完形の石刃石核（図10）や骨錐、食物加工具が含まれており、家屋廃棄後の二次的混入というよりは、家屋内で行われた活動の遺棄を示すと考えられる。この所見を検証するために、床面の遺物と遺構の空間分布を詳細に記録したほか、土壌サンプルを採取した。これらの資料の分析を通して、床堆積の形成過程を調べ、雪だるま式家屋で実際に行われた世帯活動を示す証拠を示していくことを予定している。その内容としては、穀物栽培に関わる道具（鎌）の補修や食物加工、貯蔵など、農耕生活に関わる活動が期待される。

この家屋以外に、さらに2つ円形家屋がレベル4で検出されている（図7の写真左上）。この内、東側に隣接する家屋でも、部屋の中央付近に大型の炉が検出され、その周囲から大量の遺物が回収された。この建築物はレベル3でも継続して、壁の改修を伴いながら居住されたようである。発掘区の北東部分において一部検出された円形構築物は壁の保存状態がよくなかったが、内部には大量の崩落レンガが堆積していた。その下には住居の床面が存在すると期待されるが、時間切れのため、その調査は来シーズンに見送られることになった。これらの円形家屋が雪だるま式家屋の一部に相当するかどうかを確かめるためには、発掘区を東と北に拡張する必要がある。

これらの円形家屋の壁の基底部まで掘り進めると、遺物や遺構、灰などが全く含まれない褐色土が発掘区全体で検出された。この無遺物層を地山とすると、発掘区における地表面から地山までの堆積は2m弱である。先述したように、発掘区はテペの頂上付近に位置するため、この場所で検出された建築レベル4つが、ハッジ・エラムハ

ンル遺跡における新石器時代の居住を代表すると考えられる。

また、テペの周辺で試掘を行い、遺跡範囲の確認作業も行った（図3）。その結果、周囲の畑より高い部分でも新石器時代の堆積が検出されなかったため、遺跡の範囲はマウンドの見た目より小さいかもしれない。

3. おわりに

ハッジ・エラムハンル・テペにおける2014年の現地調査を通して2つのことがこれまでに分かった。1つは、私たちが「雪だるま式」とよぶ建築様式が、単にプランだけでなく入口や仕切り壁といった建築要素によっても定義されることを示す記録が得られたことである。また、この建築物の中で行われた活動を示すと期待される遺物の回収と遺構の記録にも成功した。2つ目は、地山を検出し本遺跡における最古の居住層を明らかにしたことである。

冒頭でもふれたように、ハッジ・エラムハンル遺跡の年代はギョイテペよりも古く、ギョイテペが示す初期農耕文化（シヨムテペ・シュラヴェリ文化）の由来を明らかにする可能性が期待されている。これまでも指摘したように、ギョイテペに比べて土器の出土量が非常に少ない点や、台形石鎌の出土量が多い点、雪だるま式家屋に代表される建築様式の違いなどが注目される（西秋他 2014）。今後、現地調査で採取されたサンプルを用い、遺跡の居住年代を確定すると共に、南コーカサスにおける初期農耕民の物質文化や動植物遺存体、雪だるま式家屋での活動に関する分析を進めていく予定である。

今回の調査は、アゼルバイジャン科学ア

カデミー研究助成、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究A、代表：西秋良宏）（若手B、代表：門脇誠二）などの資金をもって実施した。

参考文献（昨年分に追加）

- Guliyev, F. and Y. Nishiaki 2014 Excavations at the Neolithic Settlement of Göytepe, West Azerbaijan, 2010–2011. In Bieliński, P., Gawlikowski, M., Koliński, R., Ławecka, D., Sołtysiak, A., and Z. Wygnańska (eds.), *Proceedings of the 8th International Congress of the Archaeology of the Ancient Near East, Vol. 2: Excavation and Progress Reports, Posters*, 3–16. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Kadowaki, S., L. Maher, M. Portillo, R. M. Albert, C. Akashi, F. Guliyev, and Y. Nishiaki 2015 Geoarchaeological and Palaeobotanical Evidence for Prehistoric Cereal Storage in the Southern Caucasus: the Neolithic Settlement of Göytepe (Mid 8th Millennium BP). *Journal of Archaeological Science* 53: 408–425.
- Kadowaki, S., Y. Nishiaki, and F. Guliyev 2014 Tracing the Origins of Early Agricultural Settlements in the Southern Caucasus: New Evidence from Hacı Elamxanlı Tepe (Azerbaijan) in the 2012 and 2013 Seasons. *Abstracts of the 9th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*: 71.
- Ohnishi, K. 2015 Mitochondrial DNA analysis of Neolithic Goats in West Asia: a Case study of Göytepe and Hacı Elamxanlı Tepe, Southern Caucasus. Master of Science Dissertation. Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University.
- 門脇誠二 2014 「南コーカサスにおける新石器時代の打製石器技術—ハッジ・エラムハンル遺跡の展望」『日本西アジア考古学会第19回総会・大会要旨集』 83頁。
- 門脇誠二・大西敬子・西秋良宏 2015 「南コーカサス最古の農村遺跡から採取された家畜ヤギ骨の炭素14年代」『名古屋大学年代測定総合研究センター共同利用による研究成果報告書』26号。
- 西秋良宏・ファルハドキリエフ・門脇誠二・下釜和也・仲田大人・赤司千恵・新井才二・三木健裕・大西敬子 2014 「南コーカサス地方の新石器時代—第6次発掘調査（2013年）」『第21回西アジア発掘調査報告会報告集』40–46頁 日本西アジア考古学会。

第22回西アジア発掘調査報告会実行委員会

津村眞輝子（委員長）、石田恵子、門脇誠二（発掘調査報告集編集担当）、
下釜和也、津本英利、田尾誠敏、田澤恵子、三宅 裕、宮下佐江子
発掘調査報告集編集補佐
安倍雅史、有松 唯、間舎裕生

平成26年度 考古学が語る古代オリエント

第22回西アジア発掘調査報告会報告集

発行日 2015年3月21日

発 行 日本西アジア考古学会
〒305-8571 茨城県つくば天王台1丁目1番1号
筑波大学人文社会系歴史・人類学専攻 常木研究室
Fax: 029-853-4432
e-mail: office@jswaa.org

制 作 土師印刷工芸株式会社
